

△卒論の読後感▽

——上代

中島 悦次

昭和四十年四月本校が開校されてから、やがて第五期の卒業生を送ることになる。早いものでこの間五期に亘って七十余篇の卒論を閲読することになる。そしてそれぞれに心をこめたこれら貴重な論文の中で特に気づいた点から視て、次の三つの特長著しいものがあると感じられた。

A 資料集めを主として研究感想を従としたもの

B 資料と研究感想を半々に扱ったもの

C 感想理論を主として資料を従としたもの

これはどれがよいわるいというのではない。オリムピック競技参加のいくさのようだが、一篇を力一ぱいまとめて見ることに意義があると思う。実際大学で学ぶことは実用的な生活知識はほんの一部分である。ただ対象を見つめて実感の上立ち、自分の納得ゆくまで理論を求め考察を進めるといふ態度を身につけることが主眼であろう。それがあれば更に学問研究を志すなら、大学院へ進学して研究を積み理論を究めることもできるし、社会に出ても家庭に入っても、事に当って理性を失わず心に余裕を持って教養を生かし合理的に対処することができると思う。

論文の書き方は殊更従来の型に倣^{ノボ}めないでも、主題(テーマ)でも研究態度でも、もっと自由奔放であっていいと思う。人にはそれ

ぞれ得意、不得意があり。例えば、資料を一所懸命集めたが、どうしてもまとめがつけられないというのがあるが、それが或る程度目的に即して分類した資料集めなら研究への努力として決して軽視することはできない。又どうしても結論が導き出せないというのもあるが、実感から出たものなら研究過程の報告だけでもよい。かと思つて、僅かな資料から堂々と理論や感想を展開したのは、論理が整つていて、新鮮な、創意的なものであるなら、それはそれでよいと思う。私なども年ばかりとつても一篇をまとめることは中々容易ではない。皆さんのように若い時は、たとい未完成でも未熟でも全心を傾けたものには、個性が表われ若さがあふれ情熱がこもっているので頼もしくも好もしくもあると思う。

つまり国文科の卒論は、必ず自力で資料を熟読した実感を基礎として観察考究し得た過程を、型にかかわることなく、とにもかくにも或る程度の長篇にまとめ得たら、将来或は懐かしいとまではいかないかも知れないが、在学時代の若い心に何かプラスしたという思ひ出にはなるうと思う。

(昭和四七年二月二日記)

卒業論文のことども —— 中古

室伏 信助

卒業論文というと必ず思い出されることがある。私が卒業論文を書いていたころ、ある教授が「近ごろの学生は卒業論文のことを

『卒論』というのが多いが、自分はそういう学生の論文は見ないことにしている。なぜ卒業論文といえないのか。『卒論』とは文字どおり卒論な論ということだ。そんな論文を読まされてはたまらない」と興奮の面もちで話された。その後、他の大学の先生にその話をしたら、「うちでは大学院の学生が『修論』の相談をしたいといってきたので、どなりつけたことがある」といわれた。

世の中万事簡便の昨今、「卒論」はいまや辞書にも「卒業論文の略」などと載る始末となったが、思えば私が卒業論文を書いたのも、二十年近い今は昔のことになってしまった。しかし、あの時の教授の激した口調は、今なお耳底に深く残っていて、人前で「卒論」と言うのに、いささか憚られるありさまである。

私は時おり卒業生に会うと、学生時代の思い出として最も印象深いものは卒業論文であったということをし、しばしば聞かされる。そういう思い出をもつ卒業生は、例外なく「卒論」ならぬ卒業論文を書き残している。四年間の総決算として、その作業が苦しければ苦しきほど懐しい思い出となって蘇り、彼女の人生をより豊かなものにしたらしい。しかし、多くの学生にとって原稿用紙を五十枚以上書くということは、初めての辛い経験であることには間違いない。そこで例年、年の瀬が近づくころ、三年生に卒業論文に対する心がまえとその準備について話すことにしている。まず冬休みにじっくり考え、自分が最も情熱を注げるテーマを選び出すこと。新年に入ってそのテーマについて個々に話し合い、漸く決定の段階に至ると、今度は春休みを利用して研究文献目録を作り、研究史概観を試みて新学期に提出する。それをふまえて自身の論文の構想を具体的に導き出し、書きやすい部分からどんどん書いていく——とまあ、こん

なくあいに進めば、先の見通しは明かるい。先輩たちの論文はいつでも見られるように研究室に用意してある。それは将来、自分の論文もまた後輩たちの目にさらされることを意味する。何をテーマに選ぶかより、選んだテーマをどう扱うかに、今のところ指導の力点が置かれている。中古のゼミだからといって、すぐ源氏だ枕だとか考える必要はない。今年は珍らしく「菅家後集」や「神皇正統記」が現われた。

冬休みは教師にとって憂うつな季節だ。せめてこのうっとうしい期間を、楽しく過せるような、ハッとする論文に出会いたい。

卒論を読んで —— 中古

伊藤 嘉夫

夫子川上に立ちて曰く、逝くものは斯くの如し昼夜をやめず。などといつて、私は立ったまま毎年逝く川の水を見ている。この川、五月雨を集めて早し最上川のように、水量が増して、川幅が、堤をこえていくほどになったり、時に水流がやせて、川原はおおむね河洲になって、帯のようにほそい筋をひくといった年もある。私のいま言っているのは、私のゼミに来て、結局は私が卒業論文を読まねばならないことになる学生の数は、水量の増減が目立つことを言ったのだ。

第一回の卒業生の論文は三十二人位読んだ。この回の論文は作家研究が多かった。印象に残ったのは大石正子君の「伊勢集の研究」だった。彼女は三年の夏休みに広島大図書館で古写本を写して校本